

時事通信社の本

「」との考え方を打ち出し、そのインランドのデノミ成功例、英国百分の一（現在の十円）の小口単位の十進法移行などを述べたのち、位と、さらにその十分の一（同一関連産業の需要予想と波及効果、

年に期限がくる中ソ友好同盟相互援助条約の廃棄を予告するほど悪化している。しかし、半面、それが極限に達すると、やがて緩和へと向かう蓋然性も否定できない。

編集部だよ

▽昨年中に最終合意に達しようと呼待されていた米ソの第二次戦略兵器制限交渉（SALT II）は、ほとんどの主要問題で原則的に合意したものの、今後の折衝に三項目を残したまま、またも越年しました。

◇政権が福田から大平へ移り、日巴の最小単位を設けるべきだと提言し、注目されたが、この委員や株価や資産、ローンや自動販売の文字は数を減じたように思える。しかし、デノミが近い将来必

機や海外旅行への影響はなど、微に入り細にわたって説明を加え、デノミで損をしない方法を教えてくれている。

ブックガイド

中ソ対立と現代

中嶋嶺雄著 過程を戦後のアジアの国際環境のなかで、一枚岩的団結、といわ

中ソ対立の形成と展開

本書は中ソ対立の形成と展開の過程を戦後のアジアの国際環境のなかで、一枚岩的団結、といわ

◇政府と地下水でつながっている。と目される財界の調査機関、日本経済調査協議会の近藤委員会は、

中嶋嶺雄著 過程を戦後のアジアの国際環境のなかで、一枚岩的団結、といわ

米ソ首脳会談の開催は遠のいたようです。

世界週報バックナンバー
お申し込みは ☎(03)591-1111

12月19日号

- カギを握るインフレ格差縮小策（6カ国で発足するEMS）
- 巨大油田と世界の石油資源（CIA報告）
- 5年半ぶりのソ連（中）
- ソウル見たまき聞いたまき
- 中国の対外援助―七七年の総括（下）
- 姉妹都市⑧神戸

79年新年特大号

- 特集・不確実性時代の日本外交（平和と80年代は可能か／大平政權に注文する／国連外交はこう変わった／今の外交を昔と比べると／戦後の日本外交秘話／牛場経済外交のバランスシート／近代外交の主役たち／主要国外務省の日本セクション
- 5年半ぶりのソ連（下）

1月9日号

- 特集Ⅱ激動の年を迎えたアジア／米中関係正常化後のアジア／米中ソのパワーゲーム／米国のアジア政策／ソ連のアジア政策／日本のアジア政策／朝鮮半島情勢／中国情勢／東南アジア情勢／インド亜大陸情勢／西アジア情勢／アジアの指導者群像
- 姉妹都市⑧広島

世界週報（火曜日発行）
定価一三五〇円
編集人 藤城 博
発行人 立花 丈平
発行所 株式会社時事通信社
東京都千代田区日比谷公園一ノ三
郵便番号 一〇〇
電話東京（五九）一一二二番
接替口座 東京一五八〇〇〇番
年きめ購読料一九二〇〇円
（同時増刊号を含まず）

本書は在米被爆者に関する初の報告書だ。米國にも原子爆弾による被爆者はいたのである。それだけでなく、著者は自問して、「在米ヒバクシャ」というテーマに及ぶのが、「こうしてこんなおそかったのだらう」、六〇年代前半の留学体験に加え、七〇年春には九木位里・俊夫妻の「原爆の凶」アメリカ力展の桶渡しをし、にもかかわらず、これが七〇年代後半になってからの作業であるとは、と。

だからして、これもわれわれの視野に入るが遅かった在日朝鮮人被爆者のことや、復帰前神龍在住被爆者の姿が、本書の記述とダブルイメージになる。広島で朝鮮人被爆者に聞いても、まず原爆の話は出てこない。強制連行による苦しみの曲折が心するまでという。事情は異なるが、在米日系ヒバクシャもこゝに限られた米國內の少数民族（マイノリティ）なのだ。そして医療費の援助だけを訴え、政治的ながかり合いを過激なまでに避けながら運動を続ける彼らの姿は、米軍政下当時、基地神龍の被爆者にみられた屈折となんと似ているところか。

話を戻すと、著者は広島県人の米國移民の歴史から語り起す。そして一九四五年八月六日朝鮮人被爆者のことや、復帰前当日、何千人もの日系二世の神龍在住被爆者の姿が、本書の記述とダブルイメージになる。広島にいた歴史的背景と、彼らの個々のケースをとり、される事情を記録し、実り少ない

さやかに運動が始まるやその過程で、「お前たちは敵だったの

国家をどう超える

私たちは敵だったのか
—在米ヒバクシャの黙示録—

抽井林二郎 著

現状に及ぶ。その間の、水河のクレパスのようにも横たわる、彼我の認識の落差の激しさを、ここで紹介し尽くすことはとてもできない。

米國民のほとんどは、自らのための調査・研究機関である旧ABCRC（原爆傷害調査委）を、日本人被爆者のための米國の援助による医療機関だと思いついていて、原爆投下は戦争時における政府の正当な行為だという一貫した主張。戦中すべての日系人をキャンプに收容した底を流れるあの黄禍論や、文化・制度の違い。

著者は本書を書き上げて、しかし「終わった」という解放感が少しもない」という。思えば現在在米被爆者にはおかないの

（潮出版社・一、三〇〇円）

今般のベトナム・カンボジア問題にも強くその影を落としておる。本書はこのなかでも極めて重要な時期に相当する。第二次世界大戦終結前後から五〇年代終わりのことである。ところで、この中国とソ連の対決関係は、不変なのか、可変なのか、これは日中平和友好条約を締結し、関係を正常化している日本にとっても重要な問題である。

時代を経て、中ソ友好から中ソ対決の現段階へと至っている。本書はこのなかでも極めて重要な時期に相当する。第二次世界大戦終結前後から五〇年代終わりのことである。ところで、この中国とソ連の対決関係は、不変なのか、可変なのか、これは日中平和友好条約を締結し、関係を正常化している日本にとっても重要な問題である。

だと同国人から拾ひせかけられる事情を記録し、実り少ない

立ないしは國家エゴイズムの対立④イデオロギイ的対立ないしは教義上の異端者同士の対立④政府間の対立ないしは外交上の対立（序章）の四点であった

リンによるツアー・ロシアの権益の回復であったから、ヤルク体制それ自体が、中国ナショナリズムによって打倒されるべき対象とされたという。このよ

うな考察は随所

を「こを恐れたからではないか」と考察している。

本書の扱っている時期は極めて関心の寄せられるところだが、著者も言う通り中ソ側の資料が決定的に不足している。不

わなければならない。

（中央公論社・一、七〇〇円）

大胆な仮設の提示

中ソ対立と現代

中嶋 頼雄 著

著者はこの時期——この時期にのみ限定されないが——の中で、①②は長期にわたって継続するだろうが、③④は可変だと

期——この時期にのみ限定されないが——の中で、①②は長期にわたって継続するだろうが、③④は可変だと

ひとは、建国初期の「南ソ」一辺倒政策がなぜ選択されたかという問題にかかわる点で、著者は、高崗に指導され、ソ連との結合関係を深めながら独自

を求めなければならない。中ソ関係は、複雑な曲折にみちた展開を示しており、その歴史もツアー・ロシアと清朝の時代から革命ロシアと中国革命の

を求めなければならない。中ソ関係は、複雑な曲折にみちた展開を示しており、その歴史もツアー・ロシアと清朝の時代から革命ロシアと中国革命の

を求めなければならない。中ソ関係は、複雑な曲折にみちた展開を示しており、その歴史もツアー・ロシアと清朝の時代から革命ロシアと中国革命の

ソ連から見た石油問題



ソ連から見た石油問題

——石油をめぐる国際政治の内幕

ボリス・ラチコフ著 滝沢一郎訳

本書はソ連外国貿易省の石油問題専門家が執筆したものであるから、もちろんマルクス・レーニン主義の立場から書かれている。そこで、西側の分析に精通しているものには、若干なじめない表現がある。しかし、戦略物資としての石油の国際政治への影響力にメスを入れた点は、実に興味深く読める。

とくにエネルギー危機について、その原因は資源の枯渇といった天災的なものではなく、社会的、政治的なものであると指摘し、資本主義圏に存在する資源は通常の供給には十分であると述べていることが注目される。レーニンの言葉どおり、「人類がすぐにでも解決できる問題はいくらでもある。邪魔をしているのは資本主義なのだ」というわけ。

また、資本主義は過去半世紀に何度も原料商品の過剰と過小の危機をくり返してきたという。原料のだぶつきの前には必ず資本が原料部門になだれ込む。過剰と価格下落が起きると、資本が引き揚げられ、原料サイクルが生ずると説明している。これはW・W・ロストウの分析そっくりである。ソ連の見方を知るのに役立つ書物。

(サイマル出版会 1300円)

資源の風景



資源の風景

——暮らしの環境を見直す

遠藤一夫著

著者は、北海道大学・工学部の教授だが、技術史にも関心をもち、「技術は近代技術のみという考え方に対して、風土に規制され、庶民の経験に基づくのが本来の技術だ」という考え方を強調している。

「資源の風景」——この題名の風景は、「スケッチ」程度の意と、著者は触れているが、本書の内容は、食べもの、みず、森、石油のお話である。しかし、いわゆる資源論や、それに関連して政策論などを展開したものではない。

読書後の印象は、まさに、つれづれ草。折にふれ統計数字が駆使されているが、淡々と、時代の流れの変化につれて、資源に対する価値観も変わってきた経過を述べている。

食べものの項では、お米の備蓄よりも、むしろ大豆・小麦の備蓄・増産に工夫をこらしたらどんなものか、と言いたげだし、みずの項では使用量の70%は飲めない水でも役に立つようだとか、飲める水が全国では漏水のため年間24億ト近く失われているとか、日常、われわれが見落としている点を指摘している。ソフトムードで、日常使っている資源をもう一度、よく知っておこうという気を起こさせる書だ。(講談社 460円)



中ソ対立と現代

——「中ソ一枚岩」神話が秘めた壮大な現代史のドラマ

中嶋嶺雄著

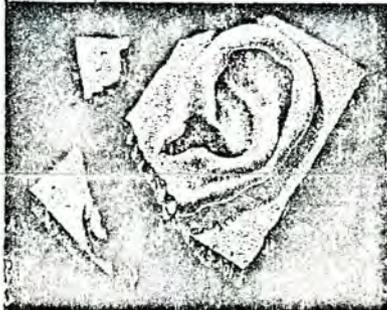
然に浮かされた情緒的な日中友好ムードが支配的な今日、このようなクールでしたたかな分析が発表されたのは意義深い。というのも日中平和友好条約の本質と、それが日本にもたらす危険でスリリングな側面について、多くの示唆を提示しているからである。

著者は本書で、中ソ対立の「起源」と「構造」を、多くの貴重な資料を駆使して説き明かすことに成功した。1950年代にみられた「中ソ友好」の絶頂期にさえも、両国間にはさまざまな緊張と違和が存在してきた」という、筆者のしつようなまでの主張には、耳をかさざるをえない。

が同時に筆者は、かつての「中ソの一枚岩的団結という神話」が、国際政治に到命的な「誤算」を生んだように、「永遠の中ソ対立という新しい神話」もまた警戒すべきである、と説く。働き盛りの筆者の、エネルギーな良識かもしれない。

本書は近ごろ目につく、論文の寄せ集め式の安易な編集ではない。構成と論理は首尾一貫している。それだけに、テーマについての深い理解は、1週間か10日つぶして、じっくり取り組んだ人にだけ与えられるだろう。(中央公論社 1700円)

耳鳴りに パピロギン



〈内服薬〉

〈外用点耳薬〉

〈外用点耳薬〉パピロギンは耳だれおよび外聴道炎など聴器自体の耳鳴りに…
〈内服用〉パピロギンS錠は耳鳴りの症状緩和にすぐれた効きめがあります。

●全国薬局・薬店・デパートの薬品部でお求めください。品切れの際は発売元へお問い合わせください。説明書・サンプルをお送ります。

包装
パピロギン(外用) 50ml 1,200円
パピロギンS錠 90錠 1,500円

石原薬品工業株式会社
東京都中央区日本橋本町4-2

メッセージ

『中ソ対立と現代』



中嶋敏雄著
中央公論社
(1700円)

●前口上、永遠の対立化、様相を呈するかに見える最近の中ソ両国間。その問題点のありかをヤルタ体制に出发をもとめて分析する。著者は当代きつての「現代中国学」の権威であることは、改めていうまでもない。

■著者から 最近のインドシナ情勢の衝撃的な展開を見るにつけ、新しい冷戦としての、生ぬるい脱争Cold War、が、全世界的に拡大しつつある中で、中ソ対立のもつ意味は、ますます大きくなってきている。こうした中ソ対立は、もはや現代史における重要な歴史的過程になっているといえよう。戦後のヤルタ体制の形成から五〇年代後半の中ソ決裂にいたる時期の中ソ関係は、中ソ一枚岩、神話が秘めた壮大な現代史のドラマであったばかりか、その「正史」と「裏面史」のパラドックスという点においても、現代史における

最も刺激的な国際関係であった。本書では、アジアの冷戦の起源、スターリンと毛沢東の確執、朝鮮戦争をめぐる中ソ対立、フルシチョフと毛沢東の軍事防衛抗争など、現代史の未開の諸断面を、可能なかぎり資料に基づいて再構成したつもりだ。私は過去一年、たまたまオーストラリアにおいて本書の完成に没頭したが、私にとっては「現代中国論」(青木書店・一九六四年)以来の懸案を著作として書き下ろしたものだ。さらにちょうど十冊目の著書であるだけに、一つの仕事が終わったとの感慨深いものがある。

もつと生物的な大事なものだ。「いまの教育は知識と価値観だけの注入で、会社人間というもたない。生(の)第一義的な機能が育ってない子が自殺するのだ」と坂原もいった。

べたに愛されることもなく、親しい仲間もなく、親子三人水入らずで暮らしていたが、濃密な関係ではない。自殺する条件は揃っていた。予告の自殺をしても、それに気付いてくれないような家庭だった。

秀樹の取材は終わったが、社の上層部の方針は急に変わった。少年の自殺多発を徹底的に追究すれば、社会と政治の腐敗に突き当たると。秀樹の原稿はつぶされた。その夜、彼は数カ所を飲み回り、泥酔してこの怒りをぶちまけ、這うようにしてやっとなが家に辿りついた。

小説

●歌謡曲(吉野健三著)晩声社・八九〇円/いまや、歌は世につれ、ではなく、テレビにつれて、の時代だという。歌謡曲の世界を、流行らせのメカニズム、から実証するルポ。
●評価 治安警察法に依る禁止レコード二分、金明細などをよくな資料集が、もつとも興味深い。●読者対象 TVの歌謡番組ばかりをぼんやり見ている人は、一読してみては?
●警告(小塚昭三著)グライヤモンド社・九八〇円/戦争前後、ある日突然おとして新興俳句運動をおそった特高強圧事件の真相を描く、異色の問題小説。
●抜き書き 戦友ヲ群リビストルツ天ニ撃ツ(西東三鬼)、射撃手がふとうなだれて戦機機(仁智栄坊)。など
●当時、戦争の非情を訴えた反戦句。
●読者対象 ある昭和史として読んでも興味深い、広く一般向き好読物。
●女性(小坂多喜子著)永田書房。一三〇〇円/表題作のほか四編の短

実用

●小説に、小林多喜二との交遊時代を描いた読みごたえある作品集。
●著者紹介 明治生まれ、戦前のプロレタリア作家同盟からの人。
●脳細胞トレーニング(飯田宏著)太陽企画出版 六三〇円/阿字観、内鏡法、坐禅、ヨガなど、昔から伝わる各種の瞑想法を神経医学でとらえた入門書。
●読者対象 頭がもやもやする人、神経のか弱い人はぜひ一読のこと。
●食べる(柳沢文正著)日刊工業新聞社・八〇〇円/食は薬なり、食は命なりといわれること、健康維持と病気の治療にすぐ役立つ食べもの話題。著者は成人病の権威。
●豆情報 大豆はガン、カボチャは糖尿病、ピーマンは高血圧に効く。
●ニッポン旅の絵本(田中薫著)伝統と現代社・一五〇〇円/函館、七ヶ宿街道、高山、萩など全国各地のさりげない風景スケッチ旅行記。
●寸評 イラスト・ルポ作家としての手慣れた画と文がたのしい。

近い将来調印されても、効力を発する見通しはますます暗くなって

(在ニューヨーク 評論家)

新刊紹介

今日の国際問題を考えるさい、

中ソ対立を念頭におくことは常識化している。しかし、何故対立が起り、どのような経過をたどったか、という点になると、答える人は極めて少ない。漠然と、歴史の民族的対立といっただけでは、何事も、説明しにくくならぬ。

この本は、ナンにつつまれた中ソ対立の真相にせまろうとして、最近アメリカで発表されるようになった外交機密文書をはじめ、要人の回想録、従来からの中ソ研究の成果、その上、「人民日報」など既存の文献を、今日の時点から読みなおすなど、各種の豊富な資料を

中越紛争、ベトナム・カンボジャ紛争のような平和を攪乱するような行動があった場合、経済制裁を

きた。

料を駆使して、ヤルタ密約当時から、今日の中ソ対立の原因となつた五十年までにいたる各種の問題を解明し、終章では中ソ対立の将来へと言及している。

そして著者の鋭くドラマチック

『中ソ対立と現代』

中嶋 巖雄著

中央公論社刊

一七〇〇円

ものであると同時に、真相解明自身に対する知的興味を、読者の脳裡に起さずにはすまない。

たゞそれは、朝鮮動乱である。この動乱におけるソ連、中国、北朝鮮の關係については、現在、各種の論があることは、著者の指摘したとおりであるが、著者は中国義勇軍の参戦の動機に、すでに中ソ対立の影が存在していたのではないかと見る。つまり、中国の参戦は「マッカーサー戦略からの「防衛」である以上に、より直接的にはソ連の東北（満洲）再占領からの「防衛」であったように思われる」とする。

一體なせぬのか。

この常識的疑問に対して、著者は鋭い解明を行っている。紙面がないので、細かな紹介はできないが、要するにフルシチョフ時代になって両国關係が、一時的に改善されたとは事実である。しかし、中ソの安全保障、社会主義国軍設のありよう、核戦争の認識などについての差、それに中国内の親ソ派の存在など複雑な要因が重なり合って、台湾海峡の危機へと発展し、それがさらに両国關係を悪化させた、と私は読んだ。

あるいはスターリンの死からフルシチョフ時代にかけての対立の解明も、大変に面白い。常識的にいえば、中ソ対立は、朝鮮動乱をふくめスターリン時代から深刻化していったとするなら、スターリンが死に、フルシチョフ時代になって、ソ連側から対中経済協力の増強、原爆サンブル・技術資料の提供等の約束すらなされた以上、中ソ關係はスターリン時代より改善

深山成業 京都産業大学教授

な手法で描き出されてくる中ソ關係の歴史は、私の読んだ関係書の

中では、最もリアリティーの高い

で、「経済」による安全保障」ど

るか、経済に足をひっぱられるということになる。将来、経済的に

入江 昭著
「日米戦争」中島 嶺雄著
「中ソ対立と現代」永井 陽之助著
「冷戦の起源」
各中央公論社刊

東アジア関係の文献

池井 優

国際関係に関する日本の学問的水準は年を追って上昇している。第一の理由は内外の文献が公開され、多面的な接近が容易になったこと、第二は各種の国際会議に日本の研究者が参加して諸外国の学者と交流がひんぱんに行われていること、第三はこうした研究の成果を刊行する機会が増えてきたことである。ここに紹介する三著はいずれも以上三つの理由をふまえて、昨年刊行されたすぐれた業績である。すなわち一九七三年から文部省科学研究費によるプロジェクト「国際環境に関する基礎的研究」によって第二次大戦中と

直後の時期にテーマをしぼってシンポジウムが行われ、その成果が見事に結集したものである。従来戦争直後の研究は概説的で、評論的であったのに対し、三著とも実証的の問題を提起する方向で記述がすすめられている。永井氏の著書は冷戦の

ならず、巻末の膨大な注と引用文献からも多くを学ぶことができるであろう。

再検討するところからはじめ、東アジアにおける冷戦の展開を中国革命、アメリカの封じ込め政策の動揺、そこから生じた東アジアにおけるヤルタ体制の動揺と朝鮮戦争の発生を膨大な研究書にあたり大胆な論理を組み立て提示している。今後冷戦に取り組む研究者は、本文のみな

中島氏の『中ソ対立と現代』は、中ソ対立の発端をヤルタ体制そのものに求め、従来の一九五六年のスターリン批判を契機とするとの通説に対してその根が歴史的に根深いものである点を立証しようとしている。特に毛沢東とスターリンの対立は、一九五〇年代初期の向ソ一辺倒政策の時期でさえ毛にとつて苦しい選択であったこと、中ソ友好同盟条約交渉の際ソ連側が様々な利権を要求し、中国を従属させようとしたこと、朝鮮戦争に対する中国の参戦はソ連の旧満州支配を警戒する行動の一環

であることなど限られた資料から新たな問題を提起している。

入江氏の『日米戦争』は日米両国の対応は根本的には類似しており、国家間の相互依存性を前提とし、政治的、経済的、思想的に安定した国際秩序を志向していた。このように基本的な姿勢や役割が似ていたからこそ一九三〇年代と戦時中の対立にもかかわらず、戦後両国の協調関係が可能であったと結論する。日米の根本資料を駆使して仮説を実証しようとする大胆な試みがなされているのは前二著に劣らない。

以上三著とも今後東アジアの国際関係を専攻する研究者にとつては、著者の姿勢に賛成反対は別にして必読の文献となるであろう。

(慶大教授)

◆「中ソ対立と現代」(中嶋嶺雄著) 中国が三日、「日本敵視」の中ソ友好同盟相互援助条約の廃棄を決めたことにより、また国際政治は新たな段階に突入したが、この中ソ対立を歴史的にさかのぼってち密に検証したのが本書。スターリンと毛沢東の歴史的な確執はどうして生まれたのか、フルシチョフと毛の軍事防衛抗争はどう展開されてきたか、中ソ破局にいたる現代史の秘められたドラマがここに余すところなく描かれている。

(中央公論社・二七〇〇円)

◆「対談日本人材論」(会田雄次著) 経済大国となった日本を転換期の世界でどの方向に導くか。今ほど人材が必要な時はないのかわが国では下士官クラスに有能な人が多いわりに将校がいない。少し傑出した人物が出るたびに足を引っ張ってしまう。激動期の指導者の条件や育て方、教育の改革などを宮沢喜一、日向方齊、桐島洋子ら各界のリーダー十二人と話し合う。

(サンケイ出版・九八〇円)
◆「再建工作」(津留六平著) 京都・北野に赴任してきた銀行の支店次長を狂言回しに、間屋、機屋、染屋など西陣の繊維業界に生きる中小企業経営者の浮き沈みを生きた人間模様豊かに描きながら、

企業と人間の接点を探る異色の経済小説。著者が銀行生活三十年の体験の持ち主だけに、銀行と企業間の折衝など真に迫った面白さがある。日経の懸賞募集選作。(日本経済新聞社・九五〇円)

として魅力的なもので、こんな役やれたらいいなあ、なんて思ったら、檀ふみさん主演で映画になっちゃったのよ。

(理論社・二二〇〇円)

新編ニュースの中から、ビジネス・スマンにとって重要と思われるものを選択して伝える「価値ある情報」(ダイヤモンド社)という雑誌があるがこの別冊として、「情報と発想」読本」がこのほど出版された。A5、192頁、A

羨望の二本

アウロラ・テッシー

高級ボールペン
バーメイル：15,000円・シルバー：10,000円・エコスタイル：6,500円

読まれています

(新宿・紀伊国屋)

- ①「七次元よりの使者」0巻 五井野正 (350円・創栄出版)
- ②「足寄(あしよろ)より」松山千春 (780円・小学館)
- ③「地球を止める」A・ニューリレー、L・プリカス、青井陽治他訳 (600円・劇書房)
- ④「算命占星学入門」和泉宗章 (650円・青春出版社)
- ⑤「試験に出る英単語」森一郎 (500円・青春出版社)
- ⑥「試験に出る英熟語」森一郎 (570円・青春出版社)
- ⑦「どんな病気も食べながら治せる」松本 紘斎 (650円・徳間 店)
- ⑧「七次元よりの使者」①巻 五井野正 (750円・創栄出版)
- ⑨「在家主義仏教のすすめ」久保 継成(980円・いんなあととりっぷ)
- ⑩「七次元よりの使者」②巻 五井野正 (750円・創栄出版)

(銀座・旭屋)

- ①「雷鳴の聞える午後」辻 邦生 (1100円・中央公論社)
- ②「在家主義仏教のすすめ」久保 継成(980円・いんなあととりっぷ)
- ③「くれなゐ」 渡辺 淳一 (880円・集英社)
- ④「ファッション革命」 しばはま やすみ (550円・日本経済新聞社)
- ⑤「どんな病気も食べながら治せる」松本 紘斎 (650円・徳間書店)
- ⑥「七次元よりの使者」0①②巻 五井野正 (0巻350円、①②巻各750円・創栄出版)
- ⑦「サザエさんうちあけ話」 長谷川町子 (580円・姉妹社)
- ⑧「重役にスカウトされる法」 江島優、福井徹 (680円・ロングセラーズ)
- ⑨「有吉佐和子の中国レポート」 有吉佐和子 (800円・新潮社)
- ⑩「算命占星学入門」和泉宗章 (650円・青春出版社)

次回は23日(月)発行に掲載します。

中嶋嶺雄著

『中ソ対立と現代』

渡辺長雄評

(日興リサーチセンター顧問)

戦後アジアの国際環境については、その現史的な重要性にもかかわらず、学問的検討がなされていなかったが、著者はその情熱を傾けて美事にこの道を啓開した。豊富な資料を渉猟して史実を可及的に検証し、教示するところが多し。本書は中・ソのイデオロギー論争にはふれず、また一九五〇年代を史実分析の対象にすえているのが特徴的だ。

一九四五年二月、第二次大戦終結直前の米・ソ・英のヤルタ秘密協定は、米・英がソ連の対日参戦を求めるあまり、肝心な中国の主権を犠牲にして、ソ連の極東權益回復の野望を容認したもので、米國はこれを後悔し、ヤルタ体制が戦後の米・ソ冷戦の淵源となる。それは、当初からバランスを失った中ソ同盟

に端を発し、朝鮮戦争と東北(高崗事件)をめぐる中・ソの確執、スターリン死後の対立緩和を経て、金門・馬祖の危機における切迫した両国の駆引と、次第に中国ナショナリズムは抵抗の度を高める。一九六〇年、ソ連の対中援助の停止、六三年夏の中・ソ両党会談の決裂、六九年の中・ソ軍事衝突は、やがて七〇年代の米・中接近をもたらし、ベトナムはソ連に走った。問題の中ソ友好同盟は三十年で終わり、ついにヤルタ体制は崩壊した。

朝鮮戦争解釈の「仮説」が本書のハイライトの一つだ。スターリンの戦後アジア政策等を大きく背景としながら、過熱していた南北朝鮮の対立を触媒とした北からの「民族解放戦争」だとし、中・ソないし、中・ソ・北鮮の共同謀議説を斥けている。米國は豊かな中国情報にもかかわらず中・ソ一枚岩を過大評価し、かつ中国の参戦を予見せず、「善意」の敗北を喫した。台湾防衛を先取したために、中国の不本意な対ソ依存を促し、かつ重い「台湾問題」を背負ってきた。

中ソ同盟は毛沢東が改善したとはいえ、外

岸田秀・伊丹十三著

『哺育器の中の大人たち』

『ものぐさ精神分析』で一躍名を知られるようになった岸田氏に、「子育て十三」の異名をとる伊丹氏が質問する形式の対談である本書のテーマは、岸田氏の「唯幻論」である。これは、吉本の「共同幻想」、土居の「甘え」を越え、人間とのもつ文化を一刀のもとに斬る宝刀である。

人間の行動は本能によるのではなく、文化によるのであることを明らかにしつつ、ならば文化というものは、人間の作りもの(幻想)であるから、これを絶対のものとして不幸な行動(戦争など)をするのは馬鹿らしいことであると説く。

岸田氏の「唯幻論」には、まだ理論として完成されていない面も見られるが、伊丹氏のようなよきパートナーを得て、本書は岸田理論入門書としては、絶好のものであり、常識の奴隷になっている人は是非読むべきである。

(朝日出版社 九六〇円)

金山宣夫著

『比較生活文化事典②』

パンダが日本に贈られて以来、中国ブームが続き、昨年はその頂点だった。各界で訪中団がつくられ、マスコミはそれらの訪中記を報道する。しかし中国は、「外資」に演出した特別の顔しか見せていない。つまり私達が目にする訪中記なるものは、人びとの表情は明るかった。式のもの、あるいは、限られた情報の中で考えられていた中国の姿と何ら変わりのないものになるのである。そこで本書の著者は、絵にかいたものではない、もって人間臭のする社会主義に接しなければならぬと考へ、文化比較による分析を試みたのである。一章は、中国のレストランでは白湯を入れた茶桶がテーブルに置かれており、水は出さない。ホンコンでは必ず茶が出され、水も頼めばもらえる。といった生活文化の比較。二章は、社会環境や心理、行動様式などについて書かれている。中国を知る手掛りとなる一冊である。

(大修館書店 一八〇〇円)

書評

モンゴルのソ連寄りの独立、旅順・大連(不凍港)、長春鉄道を求める屈伏の所産で、向ソ一辺倒は見せかけだけに過ぎなかった。中国は米國を恐るる以上に、ソ連が朝鮮戦争の国際性を口実にして東北を再占領することを恐れて、参戦にふみ切ったとする。中国は国連からは侵略者の烙印を押され、消耗し、ソ連からは兵器の代金を取立てられ、台湾解放の機会を失い、かつ米・ソへの溝を深めたわけで、國威の発揚と国内統一の代償は大き過ぎた。ソ連は、中国とともに米國の参戦を予見できず、中国の疲弊と東北への勢威強化を願って死の商人を決め込んだが、中国に怨念のタネをまいてしまった。朝鮮戦争はソ・米・中のエゴイズムと誤算の相乗結果であった。そして誰も朝鮮民族の憐れを顧みなかった、とす。ベトナムという国際的内戦でも同様だ。中・ソ一枚岩という神話が破れると、こんどは中・ソ永遠の対立という新しい神話が、一転して生成しかけている風潮に対して警告するのが著者の主張の一つだ。戦後の東西冷戦も、極限から緩和に向った。中・ソ冷戦も

社会主義国家間の特殊性を越えているだけに、とくに中国の内政上の要請を充足し、やがて緩和へと向う蓋然性を否定しえないとし、以前の鄧小平の対ソ観にも言及する。

中国のアルバニア、ベトナムとの決別、ユーゴへの接近、米・中の劇的正常化など、国際政治の有為転変をみることにつけ、この篤学の見解は大いに傾聴すべきだろう。ただ、私にはやはり、中・ソ間に小和解はあるうが、かなり長期的に融和はあるまいと見通す一人だ。現に中越戦争という代理戦争が進行中である。賢明な著者も認めるように、中・ソには歴史的、民族的抗争が敵存する。そこが本質で、政府間の緊張緩和は、小妥協に過ぎない。またナショナリズムは社会主義という共通項に優先しがちだ。中ソ同盟は砂上樓閣だという検証こそ、逆に対立の継続性を物語っているに等しいか。その「友好」も歴史的には瞬時に等しかった。それに、中国の近代化が対ソ抗争を刺激剤として求めている点も、見なければなるまいと思う。

(中央公論社 一七〇〇円)

どのことにはあるまい。二年程前、この事件を美術雑誌で読んだ私もそんなふう思った。問題になったパーマーについて、私にはあまり印象がなく、思い出して数年前西洋美術館であった「英国風景画展」のカタログを引張り出してみてやっと納得がいったような案配だった。むしろ私の狭い知識など問題外だが、それにしても、どこかのガラス越しか図版でしかこうした名品にはお目にかかれぬ私などには、それらの真贋騒ぎなどどこか外国の気象の話でも聞くようなものだった。だからキーティングなどという名もすぐに忘れてしまったのである。

しかし今度、その当の「犯人」の語る生い立ちを読んで私は感動した。そこには何千ポンドやらの重要美術品の噂話を聞く空ぞらしきはなかった。

あるのはただ、どこにでもいる、貧しい「労働者階級」出身の一人の息子が、ただひとつ、絵を描きたいなどという「大それた」希望を持ったがために、運命に背められて行く、そしてそれに、酒を呑みながら、笑いながら闘ってきた、寂しい男の生涯であった。

「私たちの一日は夏であれ冬であれ朝五時半きっかりに始まった。いつも真先に起きるのは母だった。母はまず私にコンデンス・ミルクで甘くした紅茶をもつてくるのが習わしだった。」

「さあ、顔を洗って、服を着な。そうしたらひと走りネルソン夫人のところへ行つて六ペンス何とか借りてきておくれ、いいかい。もしネルソンさんに手持ちがなけりゃプランチ夫人をあたってみとくれ。それがすんだら食料品屋に行つて朝食を買つてきておくれよ」

……これは私が六つときで、貧民窟を半時間でもいいから脱け出すことができるのがただられしくて、早足ででかけたものだ……その当時は近所の間ではすばらしい共同体の精神がみなぎっていた。……金曜日にはかならずネルソン夫人は私の来るのを予期していた。彼女の夫は電車の運転士で木曜日が給料日だった……」

それに続くこの六歳の少年の大活躍ぶり——「事故にあつたこま切れ肉」を買い、八百屋では選別ではじかれた野菜をかき集め、食料品店では一番脂肪の多いベーコンをと。そして彼の大活躍で揃った朝食を

つって「描かせるクラシックを、専ら「人間をこのように搾取する絵画ディーラーたち」に復讐するためにのみ、世に出し続けたと言っている。

話には嘘もあるだろう、とは筆記者もことわっているところだが、大概はたわいのない、つまり決して政治的でない彼のホラも含めて、一人の貧しい、しかし夢を持って一生懸命に生きてきた男の生涯が伝わってくる、そうした文学的な感動も残る一冊であった。

(新潮社・一五〇〇円)

本格的な日ソ対立の分析

中嶋嶺雄著『中ソ対立と現代』



中嶋嶺雄著『中ソ対立と現代』

中ソ対立の研究は、現代社会主義論における最重要課題であるのみならず、現代世界の正確な動態を予測するためにも、必要不可欠なテーマである。ところが、この中

ソ対立というテーマは、その重要性がひろく認識されているのに反して、研究は必ずしも十分におこなわれているといえない。

その理由の一つは、中ソともに、公表する諸資料は、きわめてイデオロギー的な宣伝文書、あるいはマルクス・レーニン主義の教義解釈の正統性をあらそう論争的性格をもつものがおおく、真の中ソ対立の理由が、背景にかくされていることがおおい

『誰かが見ている』

メアリ・H・クラーク著 中野圭三訳

二年半前に妻・ニーナを殺された、アメリカの有力雑誌の編集長の一人息子と恋人の女流作家が誘拐された。フォクシーと名のる犯人は、八万二千の身代金を要求してきた。この額は、ニーナの遺産とほぼ同じだった。誘拐された二人は、ニューヨークのグラウンド・セントラル駅地下の秘密の二室に監禁される。身代金奪取に成功した犯人は、時限爆弾をセットしたと通告してきた。その時刻は、ニーナ殺害犯の処刑時刻と一致していた。捜査陣は爆破前に二人を救えるか……。精神異常者、死刑廃止論争など現代アメリカの断面を織り込みながら快適なテンポで読者を引きつける。(新潮文庫・三六〇円)

城山三郎著

『海外とは日本人にとって何か』
本書は、大地燃えるイランから始まり、アラブ首長国、英国、メキシコ、米國、カナダ等に働く日本企業家の駐在員、移民の生活を現地取材し、克明にその実態を報告している。長年の海外生活に順応したため、海外を「仕事の間」から、「生活の間」として見直す人、本社からの帰国命令を拒んで現地に残る人、また逆に「日本が一番いいですよ」とつぶやいた人……。それらの人々を通して、「海外とは何か」、「日本人とは何か」を問ひ、ひいては「人生の価値とは何か」を問ひかける。即ち、本書は、日本人の新しい「生き方」を考えるうえの材料を提供してくれる。(文藝春秋・八二〇円)

朝日新聞社編

『恋愛と結婚』

『朝日新聞一〇〇年の記事にみるシリーズ』(全十巻)のうちの一巻。明治、大正、昭和の三代にわたる「恋愛と結婚」にまつわる庶民の哀歓、奇習、奇聞、自由恋愛、悲恋、狂恋、そして国際ロマンスの数々が集められて

いる。
「モルガンお書」その落籍と失恋、「松井須臾子、師範月の後を追ひ自殺」、「有馬武郎、婦人記者と難井沢心中」、「谷崎潤一郎、雪代夫人を佐藤春夫に譲る」、「岡田寛子、雪代の樺太杉木良吉と謎の越境」など、人生ドラマのパノラマが生々と眼前に展開する。(朝日新聞社・一五〇〇円)

『現代日本の政治72-77』 高島通敏著

オイル・ショックから五年、大学の反乱からすでに九年。ひとつの時代が終わったことは確かだが、どのような時代が始まったかは誰の目にも定かではない。歴史には、そういう時代がしばしばある。たとえば、ルネサンスの時代がそうだった。そういうとき、ひとは、自分の足下を見つめ、自分の内側からの声に頼って生きることに専念した。

本書は六年間、主に新聞に書いた政治についてのエッセイ集で、全体の主眼はひとつひとつの現象のおく底にある構造を見究め、その意味を自分に即して考えたい、ということにある。

(三一書房・一八〇〇円)

矢島 鈞次

(東京工業大学教授)

えつらんしつ

中嶋嶺雄著

中ソ対立と現代



年に一度は「座右書」に出合う幸福に、今まで私はあずかっていた。読書する楽しみは、座右書との出会いを求めてのさすらいにあるのかも知れない。今から十年程以前、神奈川県教育センターを訪問した帰路、なに気なく立ち寄った本屋で手にした中嶋嶺雄著「現代中国論」も私の座右書の一つとして、いつでも机から手のとどく書棚にある。今度、その棚に「中ソ対立と現代」が新しく加わった。決してオーバーな表現ではなく、中国学の極限を資料的にも、分析的にも示してくれたのが本書であると同時に、日本をとりまく近隣国現代史としても最高水準をいく本であろう。一章一章には、歴史の流れを大きく変える決定的瞬間のドラマがある。その感情の高まりを著者は極力抑えて、多岐にわたるデータを駆使してクールに九分通り説明して、残りの一分を読者の観察と説明努力にゆだねる手法をとっている。

序章で、モンゴル、東北、新疆が中ソ両国の「中間地帯」であるのに比して、朝鮮半島は中ソ両国の「緩衝地帯」である、インドシナ半島を含んだこの緩衝地帯が常に中国との深いかわりを持ちながら、中国という文明の中心地域では熱戦の舞台とはならず、不幸なことに中国を中心とする二つの周辺地域が熱戦の対象となった文明史的展開は、まことに説得力に富む。

第一章にも、いくつかのドラマが秘められている。ヤルタ協定はソ連に極東情勢を全面的に掌握するフリーハンドを与えてしまったこと、ヤルタ協定実行、ポーランド問題などを通じてのアメリカの対ソ不信、それにもかかわらずアメリカはなぜ日本に原爆投下を敢えて行ったのか、そこにはソ連牽制の影が大きく浮彫り

にされていると判断できる。そして最後に日本占領にソ連を参加させないというトルーマンの決意へと固められていくドラマの大きなうねりは、アカデミックに見事である。

第二章の山場はつぎの箇所にある。ヤルタ密約に中国は手放しで称賛し、アメリカの抗日努力での共同性に感謝の意を七全大会で公表したにもかかわらず、アメリカの対華政策が常に不分明で、ついにアメリカは「原爆独占の喪失」「中国の喪失」「中国チトー化の喪失」という「三重の喪失」を結果するに至る悲劇的道行きであろう。とくに、「ステイルウェル・グループ」というアメリカの親延安派の存在は忘れ難い。

第三章の中心は、中ソの本来的不信の一幕であろう。アメリカのハリマン大使に向ってスターリンが「中国の共産主義者はマリーガリン共産主義者」だときめつけるくだり、モスクワにおける毛沢東に対するスターリンの冷遇と毛のねばり腰交渉、現在話題になっている中ソ条約の実効の発効が朝鮮戦争開始後の五〇年九月であったことなど、教えられる点が多に多い。

第四章の朝鮮戦争はドラマとしても、資料としても一級の出来映えである。今度公表された国務省文書による「先攻論争」への説明、アチソン演説で「現実には攻撃されたとき、第一に頼りになることは攻撃を受けた国民がまずそれに抵抗すること」という常識論、トルーマン・マッカーサー戦略抗争の背後にあるアメリカの中国への一貫した配慮などの諸点についての、資料的に裏打ちされた分析はすばらしい。

その他、高岡同盟の背後の支持者スターリンが存在したと、スターリン死後の中ソ対立、中ソ対立の神話を過大評価することの危険性など、中ソ米をめぐる現代国際環境分析の最高水準を示してくれた決定版が本書である。著者の努力に敬意を表するとともに、本書を本年の吉野作造賞候補図書に私個人としては推せんしたい。

(中央公論社・一七〇〇円)

矢島 鈞次

(東京工業大学教授)

えつらんしつ

中嶋嶺雄著

中ソ対立と現代



年に一度は「座右書」に出合う幸福に、今まで私はあずかってきた。読書する楽しみは、座右書との出会いを求めてのさすらいにあるのかも知れない。今から十年程以前、神奈川県教育センターを訪問した帰路、なに気なく立ち寄った本屋で手にした中嶋嶺雄著「現代中国論」も私の座右書の一つとして、いつでも机から手のとどく書棚にある。今度、その棚に「中ソ対立と現代」が新しく加わった。決してオーバーな表現ではなく、中国学の極限を資料的にも、分析的にも示してくれたのが本書であると同時に、日本をとりまく近隣国現代史としても最高水準をいく本であろう。一章一章には、歴史の流れを大きく変える決定的瞬間のドラマがある。その感情の高まりを著者は極力抑えて、多岐にわたるデータを駆使してクールに九分通り説明して、残りの一分を読者の観察と説明努力にゆだねる手法をとっている。

序章で、モンゴル、東北、新疆が中ソ両国の「中間地帯」であるのに比して、朝鮮半島は中ソ両国の「緩衝地帯」である、インドシナ半島を含んだこの緩衝地帯が常に中国との深いかわりをもちながら、中国という文明の中心地域では熱戦の舞台とはならず、不幸なことに中国を中心とする二つの周辺地域が熱戦の対象となった文明史的展開は、まことに説得力に富む。

第一章にも、いくつかのドラマが秘められている。ヤルタ協定はソ連に極東情勢を全面的に掌握するフリーハンドを与えてしまったこと、ヤルタ協定実行、ポーランド問題などを通じてのアメリカの対ソ不信、それにもかかわらずアメリカはなぜ日本に原爆投下を敢えて行ったのか、そこにはソ連牽制の影が大きく浮彫り

にされていると判断できる。そして最後に日本占領にソ連を参加させないというトルーマンの決意へと固められていくドラマの大きなうねりは、アカデミックに見事である。

第二章の山場はつぎの箇所にある。ヤルタ密約に中国は手放しで称賛し、アメリカの抗日努力での共同性に感謝の意を七全大会で公表したにもかかわらず、アメリカの対華政策が常に不分明で、ついにアメリカは「原爆独占の喪失」「中国の喪失」「中国チトー化の喪失」という「三重の喪失」を結果するに至る悲劇的道行きであろう。とくに、「ステイルウェル・グループ」というアメリカの親延安派の存在は忘れ難い。

第三章の中心は、中ソの本来的不信の一幕であろう。アメリカのハリマン大使に向ってスターリンが「中国の共産主義者はマーガリン共産主義者」だときめつけるくだり、モスクワにおける毛沢東に対するスターリンの冷遇と毛のねばり腰交渉、現在話題になっている中ソ条約の実効の発効が朝鮮戦争開始後の五〇年九月であったことなど、教えられる点之余りにも多い。

第四章の朝鮮戦争はドラマとしても、資料としても一級の出来映えである。今度公表された國務省文書による「先攻論争」への説明、アチソン演説で「現実には攻撃されたとき、第一に頼りになることは攻撃を受けた国民がまずそれに抵抗すること」という常識論、トルーマン・マッカーサー戦略抗争の背後にあるアメリカの中国への一貫した配慮などの諸点についての、資料的に裏打ちされた分析はすばらしい。

その他、高岡同盟の背後の支持者スターリンが存在したこと、スターリン死後の中ソ対立、中ソ対立の神話を過大評価することの危険性など、中ソ米をめぐる現代国際環境分析の最高水準を示してくれた決定版が本書である。著者の努力に敬意を表するとともに、本書を本年の吉野作造賞候補図書に私個人としては推せんしたい。

(中央公論社・一七〇〇円)

モロコシ主義と国際政治
1914-1918
1919-1920
1921-1922
1923-1924
1925-1926
1927-1928
1929-1930
1931-1932
1933-1934
1935-1936
1937-1938
1939-1940
1941-1942
1943-1944
1945-1946
1947-1948
1949-1950
1951-1952
1953-1954
1955-1956
1957-1958
1959-1960
1961-1962
1963-1964
1965-1966
1967-1968
1969-1970
1971-1972
1973-1974
1975-1976
1977-1978
1979-1980
1981-1982
1983-1984
1985-1986
1987-1988
1989-1990
1991-1992
1993-1994
1995-1996
1997-1998
1999-2000
2001-2002
2003-2004
2005-2006
2007-2008
2009-2010
2011-2012
2013-2014
2015-2016
2017-2018
2019-2020
2021-2022
2023-2024
2025-2026
2027-2028
2029-2030

中嶋嶺雄著
『中ソ対立と現代』 木戸 莚

中央公論社／一九七八年／二九八ページ

中ソ対立についてはすでに多くが語られており、評者もそれについてまったくの門外漢ではないということ前提に、正直いって多少とも軽い気持ちで本書を読み始めたが、読み進むにつれて、そうした前提がとんでもない思い違いであることを痛いほど悟らされた。次つぎと指摘される事実の意外さと歴史の重みにきわめて強い衝撃をうけた。まずその点を告白しておきたい。

第二次大戦末期のヤルタ体制の形成から一九五〇年代後半に至る時期にかけて、中ソ関係は、たしかに部分的な摩擦や不協和音が発生してはいたものの、基本的には中国側の「向ソ一辺倒」の立場にみられるように、強固な同盟関係を基礎とする友好的、協力的なものであった、というのが一般の見方であった。本書はそういう常識的な中ソ関係イメージを根本的に改めることをわれわれに促すだけでなく、中ソの

それは状況の変化に応じて変動しやすいものである。そのさい、民族間ないし国家間の対立の観点からみて、モンゴル、東北（満洲）、新疆という兩國間の「接触領域」は、双方のナショナリズムの激突の舞台であるという意味での「中間地帯」を形成し、他方、朝鮮半島は一種の「緩衝地帯」だったという「地政学的状況」をまず確認することを読者は求められる。そうした状況のもとで、毛沢東はおそくまで外モンゴルが中国の一部となることを予想し、他方、スターリンは東北と新疆にもソ連影響下の政権が樹立されることを期待したのであり、そういう思惑が戦後のアジア世界をかたちづくる重要な要素となったのである。

第一章「アジアの冷戦と中ソ関係」においては、「冷戦」が朝鮮戦争前後ではなく「すでにヤルタ体制の展開構造そのものなかで発生」していたのであり、ヤルタ体制は「極東におけるソ連の著しい優位」を保証する反面、中国を「人身御供」にし、「中国ナショナリズムの帰結する方向……をいささかも組み込んでいなかった」という点で根本的な矛盾をはらんでいたことが明らかにされる。そういうものとしてのヤルタの密約は、「東アジアの戦後国際環境の形成のプロセスを決定的に左右」したのである。しかも、アジアにおける「冷戦」は、中国の將

莚

対立関係が戦後のアジアの国際環境のあり方を決定的に左右するものであった、という大胆な主張をわれわれに投げかけているのである。通常一九五八年ごろに端を発するとみられている中ソ間の対立が、じつはそうではなくて、ヤルタ協定そのものなかに萌芽的なたかたちで榨つけられており、四九年から五〇年代前半にかけての中ソ会談、朝鮮戦争、高崗事件などをめぐって兩國の関係は、表面上の「一辺倒」路線とは逆に極度の緊張をはらんだものになり、五八年の激発に至るまでにすでに対立の構図は決定されていた、というのである。さらに、スターリンの中国にたいするさまざまな野心とそれにしたがう毛沢東の側の強い反発が、戦後のアジアの冷戦と熱戦のあり方を方向づけるもっとも重要な要因の一つであった、とするのが本書の基本的な主題である。

この時期、すなわち一九四五年から五九年までの期間の中ソ関係は、「まえがき」において触れられているように、わが国では従来断片的

第二章「米中関係の心理と宿命」は、戦後のアジアの冷戦構造が形成される過程における米中間の誤算とディレンマを扱っている。米中関係は、「民族的かつイデオロギー的な深い摩擦に根ざす中ソ関係と違って」「永く培われた親和の紐帯」により結ばれてきた。アメリカのアジア政策の基調には「つねに中国にたいする十全の配慮と中国民族にたいする畏敬の念が潜んでいた」し、他方、毛沢東の側も戦後末期に、「われわれ中国人は、ソ連の援助を待ってはいない」「アメリカはたんに中国の経済開発を援助するのにもっともふさわしい国というだけでなく、アメリカは中国と完全に提携してゆける唯一の国でもある」と発言していたのである。しかし、「国共両党をととも十分満足させ得ない不透明かつあいまいな」対華政策をとっていたアメリカ政府は、国共内戦における共産党側の優勢とともに「中国チトー化」への期待と「中国喪失」への苛立ちにゆさぶられ、そうしたディレンマの結晶である『中国白書』を発表することにによって、さらに激しい内外の策中砲火を浴びる。トルーマン政権は、一九五〇年初

来を含んだ「その輪郭が不確定」であり、「ヨーロッパのように構造化されえなかった」ために、「一挙に沸騰点に達し、熱戦化せざるをえなかった」といえる。

にしか取り上げられてこなかったようである。その原因は、戦後国際環境の歴史的特質を明らかにするというスケールの大きな作業のなかで中ソ関係を位置づける構想がこれまで乏しかったことにあるが、それ以外に共産圏研究の常として資料的制約が大きかったことにもあるであろう。本書のなかで著者は、最近米国で公開された外交文書や、文化大革命と中ソ対立の高まりのなかで公表された裏面史料や、毛沢東の非公開文献やフルシチョフの回想録などを全面的に活用することにより、これまで隠されていた意味付けや事実の脈絡を探りだすことに成功している。

二

本書は全体で八つの章からなりたっている。序章「中ソ対立の構造と『地政学』」では、まず中ソ対立を分析する理論的視角として、四つのレベルの対立構造が明らかにされる。それは、(1)民族的対立ないしはナショナリズムの相剋、(2)国家的対立ないしは国家エゴイズムの対立、(3)イデオロギー的対立ないしは教義上の異端者同士の対立、(4)政府間の対立ないしは外交上の対立」である。これらすべては「重層的に一体化」しているが、(1)(2)の対立が歴史的に根深く、和解困難であるのにたいして、(3)(4)の

この微妙な時期の中ソ関係は、第三章「毛沢東とスターリン」において取り上げられる。スターリンは毛沢東を「マーガリン・マルクス主義者」とみなし、国共内戦の期間中蒋介石政権を認知しつづけたが、それにたいして対米右和政策を実施していた毛沢東の側は、四九年七月に「向ソ一辺倒」を宣言して大きく方向転換をした。この方向転換のもっとも重要な要因は、著者によれば「毛沢東の強烈な対ソ・ナショナリズムを実現するための戦術的配慮」であるとされる。同年八月以降中国各地でいささか不自然なソ連とスターリンにたいする称賛キャンペーンが進行するなかで、毛沢東は同年末から翌五〇年にかけて訪ソし、中ソ友好同盟相互援助条約が結ばれる。このモスクワ会談は、表面上の友好協力ムードとは裏はらに、新国家建設直後の最高指導者が二ヵ月も国を留守にせざるをえないほど緊迫したものであり、スターリンが「不凍港と鉄道をはじめとするさまざまな利権を要求」したのにたいして、毛沢東はのちほど「私とスターリンはモスクワで二ヵ月いい争っ

頭の中ソ交渉における深刻な亀裂を十分に見抜かず、国内ではマッカーシー旋風攻撃に出合っている」「中国チトー化の喪失」に直面し、やがて「決定した政策とまったく逆行する戦略を展開することになったのである」。

た」と語ったように、粘り強い抵抗を示したのであった。

三

第四章「朝鮮戦争と中ソ対立」においては、「謎だらけの戦争」である朝鮮戦争が真正面から取り上げられる。そのさい、近年アメリカ側の機密文書が公開され、すでに公刊されていた資料とあわせて、「従来の仮説や通説をあるいは覆えし、あるいは検証」することを可能にしたことが、著者がこの問題にひときわ力を入れて取り組む背景となっている。まずアメリカ政府の対応であるが、五〇年一月にそれは「韓国と台湾をもちやアメリカの戦略的対象から除外」することを決定し、「危機発生についての深刻な誤算のなかで、ひとたび戦争が勃発するや事態の重大性に驚く周章狼狽ぶり」を示し、ことに「中国参戦の可能性をまったく予見し得なかった、もしくは見くびっていた」などの点が明らかにされる。他方、共産主義陣営の側の対応であるが、著者はそれに関する「諸説」を紹介したのち、この戦争が結局は「民族解放戦争」として必然的に勃発したものであったとの「仮説」を提示し、中ソの態度に検討を加える。ことに中国に関連して、のちほど明らかにされるように中国はソ連の朝鮮戦争とのかかわり方

新疆の中ソ合弁会社解散などを含む一〇項目の宣言、協定などの文書が署名され、中国の「対ソ平等化」が前進した。五六年二月のソ連共産党第二〇回大会でフルシチョフが打ち出した「スターリン批判」にたいして、毛沢東は一面で歓迎し、他面で許容しえないという「両義的な心境」を味わったが、五七年一月のモスクワ会谈のさいには両者の溝が深まった。「毛沢東にとって、ソ連共産党第二〇回大会でのフルシチョフの問題提起が最初の戸惑いであったとしたら、今回は、その戸惑いが確執へと発展した重大な契機となった」。このように確執を増していった中ソ関係は、五八年夏の台湾海峡危機をきっかけに破局へと進んでいく。七月末から八月初めにフルシチョフがマリノフスキー国防相らを伴って事前の発表なしに訪中し、中ソ連合艦隊や共同軍事電波体制の設置を申し入れたが、中国はそれを拒否したばかりか、台湾海峡の金門島砲撃を決定していたのにそれには一言も触れなかった。八月下旬の金門島砲撃はソ連の要求にたいする回答であり、中国は重大な国際危機を作り出すことにより米台関係と中ソ条約の両方の有効性を試したのだ、と著者はいう。危機にさいして、ダレスは「戦争瀬戸際政策」をこころみ、フルシチョフは「中国と袂を分つことを決めた」のであり、この危機は「核時代

に強い不満をもち、五〇年の建軍節には「ソ連讚美に終始していた中国首脳が、中国参戦後の翌五一年の建軍節ではもはやソ連を称えていない」ことが示されており、興味深い。さらに注目すべきことは、中国の朝鮮参戦の動機が、「ソ連軍が再び、……当時は親スターリン的な高崗支配下の東北（満洲）に一挙に進駐しかねないという危機を中国側が深刻に感じていた」ことにある、とする評価が行なわれていることである。つまり、「いまや東北の『防衛』こそ、台湾解放以上に中国にとって切実な課題に転じていたのであり、それは、マッカーサー戦略からの『防衛』である以上に、より直接的にはソ連の東北再占領からの『防衛』であったように思われる」とされる。そして、「朝鮮戦争が中ソ対立の重要な歴史的段階を刻んだという意味でも、この戦争は戦後国際政治史のクライマックスだった」とする主張が生まれるのである。

第五章は、「高崗事件と東北をめぐる中ソ関係」の分析にあてられる。東北地方の党、行政、軍を一手に握っていた高崗と、華東の最高指導者であった饒漱石にたいして、スターリン死後の五三年三月の時点で毛沢東は批判を行ない、五五年三月の段階になって高崗らは東北を「独立王国たらしめようとした」として公然と告発された。著者は、この事件が「中ソ間の抗

における米中ソ模擬戦争としての歴史の教訓をさまざまな意味において現代史のページに刻印したのであった」とされる。

終章「中ソ対立の神話」では、まず「現代史におけるのちのちの神話」が問題にされる。朝鮮戦争が「それにかかわった米・中・ソ三国の誤算の相乗のうえに冷戦から熱戦に転化した」ように、歴史の経路は何重もの誤算や不決断によって決定される。それを後世の歴史家は、しばしば当事者が完全情報と十分な行動能力に恵まれていたかのように評価して判断を下すことがあるが、それが「後知恵の錯誤」である。歴史の諸条件をさまざまに仮定して「if」という問いかけをするのも「後知恵」の一種だが、それに反して「歴史の文脈に根づいたif」がありうるし、そういう「if」こそ取り上げられるべきである。中ソ関係にもその題材が多い。たとえばアメリカ政府が一方で「中国チト化」の予測と期待をもち、その意味で「歴史の文脈に根づいたif」に気づきながら、それを具体的な政策として実行しえなかった例などがそれにあたる。最後に著者は、「中ソの一枚岩の団結という神話」が崩壊した今日、「その反作用としてであろうか、今度は永遠の中ソ対立という新しい神話が生成しはじめている」ことを指摘し、「最初に提起した理論的視角に立ち

争の一環に位置づけうる重大事件であったとの仮説」を実証的に検証しようとする。そして事件の経過や中ソの高崗にたいする評価の変化について分析し、毛沢東、劉少奇、周恩来、鄧小平との関係について詳細に考証を進める。スターリンの隣接地域にたいする対外進出の方法は、東欧諸国でみられたように、「まず第一に軍事占領、第二に現政府を利用しつつその権威を奪うこと、第三には内戦や局地戦を利用しつつ相手国共産党を支持すること」にあったが、第三の点については土着の共産主義勢力が増強されることを欲せず、ソ連仕込みの親ソ派を送り込んだ。スターリンが高崗を通じて、北京の中央もしいない貿易協定を東北人民政府と結び、独自のかたちで人的交流を進めたのも、同地にソ連の影響下にある「独立王国」を築かせ、それを通じて党中央の権力を奪取させようとしたためであった。この事件に現われた中ソの角逐の根深さに改めて驚かされる。

第六章「中ソ関係の緩和と破局」においては、五三年三月のスターリンの死前後から五八年に中ソ間に破局が到来するまでの期間の中ソ関係が取り扱われる。スターリンの死後中ソ関係は急テンポで改善され、ソ連から大規模な新規の援助が与えられた。五四年秋にはフルシチョフらが訪中し、旅順口からのソ連軍の撤退、

四

政治学者による鋭い問題関心と歴史学者による綿密な史料渉猟をあわせもった本書については、教示されることのみ多く、批判すべき点はほとんどみうけられないのであるが、より以上の教示を得たい点をあえて二、三指摘しておくたい。

まず初めに、序章でみられた理論的視角、ことに四つのレベルの対立構造という分析方法は、本書全体にわたって生かされてはいるものの、一章から六章までの本文のなかでより目的意識的に展開されていれば、本書はもっと立体的な構成と内容をもっていたのではないかと思われる。中ソ対立の理論的掘下げはほとんどまだ試みられていない難事業であるが、それだけに本書の著者には歴史分析にそったかたちでその鋭い問題提起を進展させてくれることを期待

しうる。

次に、著者のいう「中間地帯」、毛沢東の言葉では「二つの植民地」のうち、東北（満洲）については満足しうる全面的な考察がみられるが、もう一つの新疆についても、それと同様に精力的な分析を加えていただきたい。四四年から四九年にかけて新疆省で発生したいわゆる「三区革命」の性格は、ソ連との関係も含めて大変複雑なようであるが、少なくともそれが本書の一貫した主題のなかにどう位置づけられるのかを示してほしかったと考える。

また、小さな点ではあるが、ソ連の第二〇回党大会で「スターリン批判」を含む新路線が提起されたことにたいする毛沢東の反応は、「戸惑い」というよりはもっと強い反発ではなかったか。また同じ五六年のポーランド政変やハンガリー動乱にさいして、たしかに中国は表面的には「ソ連中心」を掲げてハンガリー事件收拾に積極的に動いたけれども、その過程をも含めて「大國ショーヴィニズム批判」を執拗に打ち出しており、事態のなりゆき全般にたいしてき

わめて強烈な危惧と反感を抱いたとはみられな
いだろうか。中ソ対立の発端を第二〇回大会に
おく見解の誤りは本書全体が見事に証明する
ところであるが、にもかかわらず五六年に毛沢東
の側が感じた強い違和感を、対立をもう一歩進
めるパネとなった要素としてもう少し大きく評
価していいのではないかと思われる。

さらに、中ソ対立の持続性を展望することは
容易ではないが、一方では「永遠の中ソ対立と
いう新しい神話」を否認することに共感を抱き
ながら、他方、鄧小平時代に「毛沢東の対ソ認
識・対ソ態度と根本的に異なっ」た「旧実権派
の対ソ認識・対ソ態度」が復活すると予測する
のにもためらわざるをえない。毛沢東のような
感情的な対ソ反感が背後に返く反面、「四つの
現代化」の進行に伴いナショナリズムの気運は
少なくともかなり長い期間ますます強まり、著
者の分類でいえば「民族間対立、国家間対立」
の基盤がむしろ強化されるとみるのは不自然で
あろうか。

全体を通して叙述の重複がいくらかみられ、

いささか気になったが、それは比較的短い期間
のもつれあった中ソ関係に多方面から照明をあ
てる作業においては、避けられないことかもし
れない。

ともあれ、こういう学術的な書物によくみら
れるような論文集ではなく、「全部で約六五〇
枚の書き下し原稿から成っている」本書は、そ
れだけ一貫した構想と充実した実証ですべてが
統一されており、読者をとらえて離さない魅力
をもっている。終章にいうように、「ヤルタ体
制の形成から五〇年代後半の秘められた中ソ決
裂にいたる時期の中ソ関係は、その『正史』と
『裏面史』のパラドックスという点においても、
現代史におけるもっとも刺激的な国際関係であ
った」われわれはここに通史としての「裏面
史」を手にしてこれまでの「正史」がいかに虚
構のうえに築かれていたかを痛感せざるをえな
い。その意味で、本書は共産圏研究に関心を抱
くすべての人にとって、貴重な資産となるであ
ろう。

(きど・しげる 神戸大学)

〈最新刊〉

NHK健康百話 全3巻

NHK編 NHKラジオで好評の「健康百話」をもとに、病と健康に関わる切実なテーマを、医学界各分野の第一人者が語る健康知識満載の対談集。

●各850円(税別)
第1巻、第2巻：発売中
第3巻：3月下旬発売予定

NHKブックス

古代建築のイメージ

木村徳国 古代にその骨格を形成したわが国固有の建築文化を、古事記、日本書紀、万葉集等の文献から探求する学際的な試み。●650円

NHKブックス

現代「地名」考

谷川健一編著 地名は単なる記号ではないと頻繁な改変に危機を抱く研究者たちが、地名の由来に多彩な視点から追求する。●600円

日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

で、ソ連があくまで中国を従属下におき、さまざまな利権を求めるのに対する激しい抵抗があったことを、我々は知りうるのである。

しかし、本書のもっともユニークな点は、第五章の高岡事件についての部分であろう。旧満州の独立王国化を企画していた中国共産党の幹部、高岡らとスターリンの関係、そしてスターリン側からの毛沢東への高岡密告、一九五五年の高岡らの断罪というドラマティックな事件は、スターリンの死とスターリン批判の中間期におきた、中国共産党をゆさぶる大事件であったが、従来、この事件の内容は、必ずしも明らかではなかった。

著者はこの経過を追跡して、中ソ関係の中に位置づけ、あわせて、この事件に示さ

れた毛沢東の姿勢、そして、事件の処理を劉少奇、そして鄧小平にゆだねていく微妙なうごきを示している。本書では、スターリンが、極東権益、とくに旧満州について貪婪ともいえる食指をうごかしてきたことを綿密にあとづけており、その中に高岡事件をおくと、はじめて、事の真相が明白になることをしめしたものである。この章は、評者にとって、とりわけ学ぶことの多かった所である。

本書が、つねに、旧満州、モンゴルなどの中ソ対立では一見背景におかれそうな地域に視点をすえて、論旨を展開していることは、

中ソ対立の現実性を把握するうえに甚だ有効なことであった。モンゴル人民共和国と、中国の内モンゴルを分断国家として考

えよとの示唆も、学んだところである。

しかし、第四章の「朝鮮戦争と中ソ対立」は、ソ連の旧満州支配のおそれを中国の参戦とからませて論述している部分は、もうすこし緻密に展開すべきではなかったろうか。

ともあれ、本書が、本格的な中ソ対立の歴史分析の書であることは、間違いないところである。

然をいえば、ソ連ででている中ソ関係資料や回想録などを、フルシチョフの「回想録」などと重ねあわせて、使えば、もっと興味深い重厚な作品となったことであろう。

現代中ソ対立を理解する必読の書といふべき書である。

(中央公論社・一七〇〇円)



なかじま みねお 一九三六年長野県に生まれる。東京外語大学卒業。東京大学大学院卒。東京外語大学教授。この間、外務省特別研究員(六九〇七一年)などを経る。国際関係論・現代中国学専攻。著書に「逆説のアジア」「現代中国論」など。

らである。さらに、中ソ双方の文献のみならず、ヨーロッパ、アメリカ文献の渉獵が必要であり、また、言外思想をよみとることも大切な作業となってくる。

著者が、この中ソ対立研究の前途にはかかる諸困難の克服をめざして、大胆に研究を続行し、一定の成果をあげられたことに、まず敬意を表したいと思う。

本書の構成は、序章と終章をのぞいて六章よりなっている。そして、新中国の誕生前後から、台湾海峡の危機までを、ほぼクロノロジカルにおって、中ソ対立の形成と発展の歴史を展開している。終章では、中国の文革終了と、旧実権派の台頭によって「旧実権派の対ソ認識・対ソ態度は毛沢東の対ソ認識・対ソ態度とは根本的に異っていた」ことに注意を喚起し、「中ソ対立の構造的性格と歴史的な経過に照したとき、中ソ対立には、いまやその変化の可能性を

この終章が、「中ソ対立の神話」と題されているゆえんである、この考えの中に、いわば著者の中国観、文革観が凝縮しているように思えるが、それが本書の主題となっているわけではない。本書の一つの欠陥といえ、序章から六章までの一貫したテーマが、この終章と必ずしもスムーズにはつながらない点にあると思える。つまり、一九六〇年以降の中ソ対立の表面化、文革時代の中ソ対立がふれられていないからであろう。しかし、この点は、次の力作に期待するほかはない。

著者は、中ソ対立の発端をヤルタ体制そのものに求める。この米英ソの三首脳会談で構想されたヤルタ体制が、崩壊の危機を内包していたこと、つまり、ヤルタ協定密約事項で、米英はスターリンを対日参戦にさそいこむ好餌として、中国の主権侵害によるソ連の極東権益の回復をはかることを約束したことにあるとしている。中国は「人身御供」にされたのである。周知のようにスターリンは、対日戦勝利のさい、日露戦

争の復讐をなしとげたとき、凱歌をあげたほど、日露戦争の敗北を国辱と考えつづけてきた指導者であった。ヤルタの密約はスターリンにとって、外交的勝利であったし、またスターリンは中国共産党の力量を認めないかった。このスターリンの極東権益確保が、新中国誕生まもない頃の毛沢東のモスクワ訪問で、はげしい対立をうみだしたことを、第一章は説得的に展開している。

従来の一九五六年のスターリン批判を契機とした中ソ対立論を、さらに一歩歴史的に深めたわけである。さらに、この時期、アメリカの対中政策についても考察が加えられているが、本書の特色の一つが、つねに、中ソのみならず、アメリカの「眼」からみていることにあることは付言するまでもない。

毛沢東とスターリンの対立は、本書によって、意外に根深いものがあったことが明瞭に示されている。そして、当時のソ連一辺倒の政策が、実は、毛沢東にとって苦澁にみちた選択であったことが分析されている。近く破棄が予想されている一九五〇年の中ソ友好同盟相互援助条約の交渉の内幕